

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

SER89 関連資料

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 久夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009298

第Ⅱ部
関連資料・附論

土方久功主要業績及び関連文献

清水 久夫 編

1. 土方久功・自著文献

1.1 全集・選集

〈邦文〉

- 1990 『土方久功著作集 第1巻』「パラオの社会と生活」三一書房（解説・青柳まちこ「パラオの社会と生活について」）。
- 1991 『土方久功著作集 第2巻』「パラオの神と信仰」三一書房（解説・青柳まちこ「パラオの神と信仰について」）。
- 1993 『土方久功著作集 第3巻』「パラオの神話と伝説」三一書房（解説・大林太良「パラオの神話伝説について」）。
- 1992 『土方久功著作集 第4巻』「サテワヌの神と社会」三一書房（解説・牛島巖「土方久功とサタワヌ島」）。
- 1992 『土方久功著作集 第5巻』「サテワヌの民話」三一書房（解説・鳥羽修郎「サテワヌの民話」）。
- 1991 『土方久功著作集 第6巻』「青蜥蜴の夢／文化の果にて」三一書房（解説・谷川健一「全人としての土方久功」）。
- 1991 『土方久功著作集 第7巻』「流木—孤島に生きて」三一書房（解説・須藤健一「民族誌家土方久功と『流木』」）。
- 1993 『土方久功著作集 第8巻』「サテワヌ島日記／ノート」三一書房（解説・宇佐美英治「土方久功の彫刻」）。

〈欧文〉

- 1993 Endo Hisashi (ed.), *Collective Works of HIJIKATA HISAKATSU: Society and Life in Palau*, Sasakawa Peace Foundation.
- 1995 Endo Hisashi (ed.), *Collective Works of HIJIKATA HISAKATSU: Gods and Religion of Palau*, Sasakawa Peace Foundation.
- 1996 Endo Hisashi (ed.), *Collective Works of HIJIKATA HISAKATSU: Myths and Legends of Palau*, Sasakawa Peace Foundation.
- 1997 Sudo Ken'ichi (ed.), *Collective Works of HIJIKATA HISAKATSU: Driftwood: The Life in Satawal, Micronesia*, Sasakawa Peace Foundation.

1.2 単行書

〈民族学〉

- 1940 『過去に於けるパラオ人の宗教と信仰』南洋群島文化協会。
- 1940 『ヤップ島離島サテワヌ島の神と神事』南洋群島文化協会。
- 1942 『パラオ島民の部落組織』南洋群島文化協会。
- 1942 『パラオの神話伝説』大和書房（1985年、解説・大林太良「パラオの神話伝説について」、谷川健一「全人としての土方久功」、年譜〈丸山尚一編〉を付して、三一書房より復刊）。
- 1943 『流木』小山書店（1974年、『流木＝ミクロネシアの孤島にて』と題して、未来社より復刊）。
- 1953 『サテワヌ島民話』三省堂（1975年、『覆刻・サテワヌ島民話—ミクロネシアの孤島にて—』と題し、鳥羽修郎の解説を付して、アルドオより復刊）。

- 1984 『ミクロネシア = サテワヌ島民族誌』 未来社 (校訂・解説 須藤 健一)。
 〈詩集・随筆集〉
 1953 [1991] 『文化の果にて』 龍星閣 (『著作集』 第6巻に収録)。
 1955 『非詩集ボロ』 大塔書店。
 1956 [1991] 『青蜥蜴の夢 (お砂糖のように甘い南島の……)』 大塔書店 (『著作集』 第6巻に収録)。
 1965 『旅・庭・昔』 自家出版。
 1966 『鴨と共に (1955-1956)』 自家出版。
 1978 『土方久功遺稿詩集』 草原社。
 1982 『土方久功詩集 青蜥蜴の夢』 草原社 (『非詩集ボロ』, 『青蜥蜴の夢』, 『旅・庭・昔』, 『鴨と共に』 を収録。ただし, 『旅・庭・昔』, 『鴨と共に』 の一部は収録せず)。
 〈絵本〉
 1963 大塚勇三・再話, 土方久功・画 『おおきなかぬー』 福音館書店。
 1963 ハロルド・クランダー & ウルフ・レスロー作, 渡邊茂男・訳, 土方久功・画 『山の上の火』 岩波書店。
 1965 『ゆかいなさんぽ』 福音館書店。
 1970 『ぶたぶたくんのおかいもの』 福音館書店。
 1975 『おによりつよいおんまーい』 福音館書店。

1.3 定期刊行物

〈雑誌〉

- 1923 「修学旅行に関する雑稿」『東京美術学校交友会月報』 (第22巻第3号)。
 1927 「伊藤熹朔の舞台美術展」『アトリエ』 (7月号)。
 1940 「南洋の鳥景」『野鳥』 (第7巻2号)。
 1940 「群島代用食は々々」『南洋群島誌』 (第6巻6号)。
 1940 「禿山」『南洋群島誌』 (第6号7号)。
 1940 「南洋の女」『オール女性』 (第7巻10号。のち, 『青蜥蜴の夢』 〈草原社〉 に収載)。
 1940 「南洋の伝説・小ウヘリヤッシングズ」『大阪バック』 (第35巻12号)。
 1941 「バリー島の土人の木彫」『野鳥』 (第85号)。
 1941 「扉 (挿絵)」, 「パラオの踊り」 (『南洋群島』 (第7巻6号)。
 1941 「パラオ島民の自然観」 (『南洋群島』 (第7巻7号)。
 1941 「扉 (挿絵)」, 「パラオ島民の遊戯」 (『南洋群島』 (第7巻8号)。
 1941 「パラオ島民の結婚・離婚」『南洋群島』 (第7巻9号)。
 1942 「パラオ島民の暦」『南洋群島』 (第8巻1号)。
 1942 「パラオ島貨」 (『青とかげの夢』 より) 『南洋群島』 (第8巻2号)。
 1954 「サテワヌ島雑記—信仰と踊りの珊瑚礁島—」『海洋文化』 (1954年1月号)。
 1955 「動かぬ表情・面について」『美術手帖』 (第97号)。
 1955 「芸術とデーモン」『みづゑ』 (第601号)。
 1955 「南洋のトイレ」『毎日グラフ』 (10月19日号)。
 1958 「三河大工『杉浦佐助』の彫刻」『民芸手帖』 (9月号)。
 1958 「知友交歓」『のろまと気長』『美術手帖』 (第148号)。
 1959 「加工された人間の顔」『アトリエ』 (第384号)。
 1959 「南方土民彫刻に生き抜く」『トーテム』 (第25号)。
 1960 「チチリカ」『野鳥』 (第25巻2号)。

- 1960 「プリミティブ・アート」『三彩』（第129号）。
- 1960 「パラオの石神」『西東』（第5号）。
- 1961 「鳥取り」『野鳥』（第26巻1号）。
- 1961 「手ぐすねの贅沢さ」『別冊みづゑ 特集・アフリカの彫刻』（第29号）。
- 1961 「原始芸術のみなもと」(1)(2)(3)『小原流挿花』（10～12月号）。
- 1963 「鳥たちにふね」『太陽』（第1巻1号）。
- 1963 「かますとやどかり」『太陽』（第1巻2号）。
- 1963 「浜に題す」『経済界』（8月号）。
- 1964 「鶴」『野鳥』（第228号）。
- 1965 「鶴三題」『野鳥』（第229号）。
- 1965 「南洋の花」『現代挿花未生流』（第11号）。
- 1966 「島」『アルプ』（第102号）。
- 1966 「エラツタカオの猫」『日本美術』（第38号）。
- 1967 「南の島で悪口が踊る」『ことばの宇宙』（第2巻8号）。
- 1968 「今の物は本気でやれない」『日経ジャーナル』（4月号）。
- 1968 「追いつめられたところで」『美術手帖』（7月号）。
- 1982 「パラオの小話」『椰子の実』（第5号）。
- 1970 「南洋島民の裸体周辺」『日本美術』（第63号）。
- 1970 「わが心燃ゆ」(『野鳥』（第283号）。
- 1973 「ヘレン島」『野鳥』（第7巻5号）。
- 1973 「葡萄のマーク他」『悲劇喜劇』（6月号）。
- 1974 「僕のミクロネシア」『どるめん』（第2号）。
- 1976 「パラオ・サテワヌむかしばなし」『文春デラックス』（8月号）。
- 1979 「詩四篇」, 「幼年」, 「ヤニュー物語」, 「修学旅行に関する雑稿」, 「金沢の旅」, 「敦ちゃんとの旅(抄)」, 「ロタ日記(抄)」, 「サテワヌ島における結婚・離婚・姦通」『同時代』（第34号）。
- 「パラオ島民の伝説口碑と『教へ』」『南洋教育』（第7巻3号）。

〈新聞〉

- 1954 「パラオ・ホヤホヤ記」『共助義会新聞』（1月1日）。
- 1956 「お金のいらぬ国へ……」『東京新聞』（9月3日）。
- 1957 「踊り疲れりゃお正月—南洋群島よいところ—」『新夕刊』（1月3日）。
- 1959 「美術・芸談 南洋の土民彫刻から」『東京新聞』（8月11日・夕刊）。
- 1959 「世界は広く」『毎日新聞』（9月22日）。
- 1974 「南海の孤島はいま…」『日本経済新聞』（9月7日）。

1.4 その他

- 1940 「アカラップ 島釣り説話」『群島の島民と其の文化』。
- 1949 「トン」『中島敦全集〈第3巻〉』筑摩書房刊（月報付録, 「中島敦全集通信」第3号。『中島敦研究』筑摩書房〈1978〉に再収載）。
- 1960 「パラオでのトンと私」『中島敦全集〈第1巻〉』文治堂書店（月報「ツシタラ4」〈1960〉, 『中島敦研究』筑摩書房〈1978〉に再収載）。
- 1968 「青蜥蜴の夢」, 谷川健一編『青春の記録8—わが青春のとき』三一書房, 所収（1991年,

未発表原稿を加え、『著作集』第6巻に再収録。

- 1959 「パラウのクリツム人面石」『世界考古学大系』平凡社「月報5」。
1960 「パラオ島の彫り絵」『世界名画全集（第1巻）』平凡社、「月報1」。

2. 土方久功・関連文献

2.1 単行書

- 1981 岡谷公二「治療の場としての南島—土方久功 中島敦 島尾敏雄—」、『島の精神誌』（思索社）所収。
1984 矢内原伊作「土方久功の彫刻」、『たちどまって考える』（みすず書房）所収。
1989 須藤健一「土方久功」、『オセアニア物語』（鹿児島大学南太平洋海域研究センター編、めこん、1989年）所収。
1990 岡谷公二『南海漂泊 土方久功伝』河出書房新社。
1990 松居直「土方久功の造形」（『絵本・物語るよろこび』、福武書店、1990年、所収）。
1991 清水久夫「南洋の夢とロマン再び、土方久功」《私のナイーブ・アート館》第5巻、『日本—ふるさとの詩』（福田繁雄編、学習研究社）所収。
1994 川村湊「南洋趣味と岬の国」（『南洋・樺太の日本文学』、筑摩書房、所収）。
1996 川村湊「光と風と青蜥蜴の夢」（『大東亜民俗学』の虚実』、講談社選書メチエ、所収）。
2001 「ストーリーボード物語」（『地球の歩き方 リゾート319 パラオ』、ダイヤモンド社、所収）。
2005 坂野徹「土方久功と『裸の土人』たち」（『帝国日本と人類学者』、勁草書房、所収）。
2007 岡谷公二『南海漂蕩—ミクロネシアに魅せられた土方久功・杉浦佐助・中島敦』富山房インターナショナル。

2.2 展覧会図録

- 1979 『南太平洋にロマンをもとめた 土方久功展』小田急百貨店（矢内原伊作「土方久功の彫刻」、谷川健一「全人としての土方久功」、串田孫一「自己確認」、丸木俊、下中邦彦、千田是也、羽根田弥太、村田勝四郎、八幡一郎、びしょっふ英郎、中村伝三郎、安川加寿子、今岡弘、土方敬子、丸山尚一編「土方久功の歩み」）。
1987 『土方久功展』高岡市立美術館（大島清次「ゴーガンと土方久功」、土方敬子「土方久功展によせて」、丸山尚一編「土方久功の歩み」）。
1991 『土方久功展 南太平洋の光と夢』世田谷美術館（清水久夫「土方久功—その人と芸術」、須藤健一「民族誌家・土方久功のミクロネシア研究」、作者の詩、年譜・参考文献）。
2001 『土方久功 日本+南洋の表現』（館藏品目録⑤）高知県立美術館（鍵岡正謹「土方久功の人と仕事」、梶光伸「土方久功の表現」、年譜、参考文献）
2007 『パラオ—ふたつの人生』世田谷美術館（酒井忠康「あいさつ」／橋本善八「パラオ—ふたつの人生」、「折原澄子さんにきく」／岡谷公二「土方久功とポール・ゴーギャン」／勝又浩「中島敦と南洋」／岩崎清「夢はパラオを」／野田尚稔「美術家・土方久功」／年譜・参考文献）。
2008 『美術家たちの「南洋群島」』町田市立国際版画美術館（岡谷公二「『南洋群島』三代の系譜」／青木茂「美術家たちの『南洋群島』雑感」／滝沢恭司「美術家と『南洋群島』と日本近代

美術と」／豊見山愛「『南』から『南』へ」／奥野克仁「『南洋群島』以前の南洋群島」／解説・年表・文献一覧。

2.3 定期刊行物

〈雑誌等〉

- 1954 宇佐見英治「訪問・二人の作家1 土方久功」,『美術手帖』第82号。
- 1955 飯田善国「土方久功論」,『新文明』3月号。
- 1955 岡本太郎「画廊散策」,『塾友』第43号。
- 1962 谷川健一「近代崎人伝-土方久功」(上)(中)(下),『日本読書新聞』1136~1138号(1月1日,1月8日,1月15日)。
- 1968 松原濠「人と作品・土方久功」,『日本美術』第49号。
- 1977 土方久顕「黄泉の客人(歌)」,「兄は命の限界を知っていたのか」,山崎泰雄「よき魂を失う」,一瀬直行「土方さんの聖域」,青木出郎「土方氏を悼む」,今岡弘「土方さんの霊よ安らげく」,『草原』第13号(土方久功追悼特集)。
- 1979 山崎英治「内南洋旅日記から」,大岡信「『土方久功遺稿詩集』を読む」,宇佐見英治「土方久功の彫刻」,安川定男「土方久功と中島敦」,吉田敦彦「サテワヌ神話のオイディプスとウラノス」,牛島巖「土方久功とサタワヌ島」,丸山尚一「土方久功年譜」,土方敬子「思い出」,伊藤海彦「懐かしのエ・メ・ラ!」,土方久顕「回想」,池崇一「土方さんとの出会いと別れ」,新井深「土方さん」,長谷部天翠「土方先生の思い出」,小川啓司「二十年の間に」,人見鉄三朗「エイホー先生」,『同時代』第34号。
- 1979 矢内原伊作「彫刻家土方久功」,『郵政』6月号(後,『歩きながら考える』みすず書房,1982年,収載)。
- 1980 土方敬子「土方久功の歩んだ道(1)・(2)」,『婦人の友』第74巻3・4号。
- 1981 福田徳樹「土方久功関係資料」,『東京芸術大学芸術資料館昭和55年度年報』。
- 1981-1983 土方敬子「土方久功の足跡(一)~(八)」,『草原』第29~36号。
- 1985 中島洋「パラオのストーリーボード」,『アイランズ』(コンチネンタル航空機内誌)Vol.4, No.4。
- 1986 土方敬子「パラオと土方久功」,『南洋群島協会々報』第154号。
- 1987 中村伝三郎「戦後彫刻と私(7),昭和26年度の彫刻界」,『美術の窓』(12月号)。
- 1989 岡谷公二「南海の夢-土方久功の場合」,『夜想』第25号。
- 1989 岡谷公二「南に行った男 土方久功」,『芸術新潮』第475号。
- 1989 浦田義和「中島敦と土方久功-日本近代文学と南」,『沖縄国際大学文学部紀要』(国文学篇)第18巻第2号。
- 1990 清水久夫「作品解説『南島閑日B』」,『ふれあい』第9号。
- 1990 清水久夫「収蔵品紹介・土方久功『浴』」,『美術館だより』(世田谷美術館)第14号。
- 1992 岡谷公二「土方久功-南への視線2」,『フロント』第4巻5号。
- 1992 河内紀「土方久功の『南洋』を読む」(上)(中)(下),『調査情報』第403号~第405号。
- 1993 土方敬子「夫 土方久功のこと」,『岩波講座近代日本と植民地月報1』。
- 1993 清水久夫「土方久功-ミクロネシアで花開いたのびやかな感性(特集・知られざる美術家の肖像)」,『美術手帖』第665号。
- 1993 清水久夫「土方久功の造形思考-その表現主義的性向をめぐって」,『世田谷美術館紀要』第3号。

- 1993 鍵岡正謹「土佐美術史外伝 ① 土方久功」,『高知県立美術館ニュース』第3集。
 1997 井出孫六「ミクロネシアの光と風—土方久功」,『年金時代』第363~365号(『国を越えた日本人』風涛社,2003年9月,再収載)。
 2000 中村茂生「土方久功素描—白樺派を後景として」,『平成12年度高知県立美術館研究紀要』。
 2002 清水久夫「南洋/エクゾティズム/表象:土方久功をめぐる」,『立命館言語文化研究』第14巻1号。
 2002 岡谷大二「パラオ好日—土方久功と中島敦」,『新潮』第99巻第5号。
 2002 岡谷大二「南洋群島の彫刻家 杉浦佐助と土方久功」,『穹+』第7号。

〈新聞〉

- 1939 「南洋土民風俗 ①, ②, ③」,『朝日新聞』(7月1・2・3日)。
 1951 「小道具を作る彫刻家」,『東京新聞』(12月26日)。
 1953 「原始美-土方久功の作品から」,『新夕刊』(9月25日)。
 1957 剛頰「美術人論断 土方久功—南洋の土人芸術を歌う叙情派」,『東京新聞』(1月29日)。
 1979 谷川健一「土方久功のこと」,『東京新聞』(4月10日・夕刊)。
 1979 「土方久功の特集」,『日本経済新聞』(8月24日)。
 1987 稗田董平「南海の光・土方久功(上)(中)(下)」,『富山新聞』(4月21・28日,5月7日)。
 1987 「土方久功展によせて—一人と作品(1)~(6)」,『富山新聞』(5月7~13日)。
 1987 大島清次「土方久功展—ゴーガンと土方久功」,『富山新聞』(5月12日)。
 1987 「土方久功展に寄せて—その原始性と現代」,『富山新聞』(5月19日)。
 1987 谷口義人「土方久功展に寄せて—原始芸術の象徴性」,『富山新聞』(5月24日)。
 1987 「土方久功の世界-画家・般若一郎に聞く」,『富山新聞』(5月26日)。
 1987 吉田俊光「土方久功展に寄せて—今も残る日本語」,『富山新聞』(5月31日)。
 1987 清水久夫「人と芸術—土方久功」,『公明新聞』(6月16日)。
 1987 清水久夫「土方久功の再発見」,『公明新聞』(5月30日)。

2.4 覧会評・紹介

〈雑誌〉

- 1927 光のぶゆき「土方久功氏の個人展覧会」,『アトリエ』第4巻4号。
 1927 (李)「土方久功氏彫刻展覧会」,『日仏芸術』(4月号)。
 1955 宇佐見英治「土方久功個展」,『みづゑ』(第599号)。
 1955 岡本謙次郎「作品紹介・土方久功『蕃首・男』」,『美術手帖』(第97号)。
 1957 岡本謙次郎「土方久功個展」,『美術手帖』第122号)。
 1979 「土方久功遺作展」,『新美術新聞』第191号)。
 1986 「土方久功展」,『新美術新聞』第468号)。
 1981 「土方久功展—南太平洋の光と夢」,『新美術新聞』第621号)。
 1991 「サライ美術館・土方久功展—南太平洋の光と夢」,『サライ』第3巻22号)。
 1991 丸木俊「土方久功展—南洋に生きた,“今”浦島太郎」,『月刊美術』第195号)。
 1992 池澤夏樹「幸福な人生—土方久功展」,『よむ』第11号(『読書癖Ⅲ』みすず書房,1999年,再収載)。

〈新聞〉

- 1927 (良夫)「土方氏の個展」,『毎日新聞』(2月27日)。
 1927 「土方氏の彫刻」,『都新聞』(2月27日)。

- 1927 「個展に見る新人の彫刻 土方久功氏の作」『国民新聞』（2月25日）。
- 1951 「土方久功彫刻展」, 『毎日新聞』（4月12日・夕刊）。
- 1953 高村光太郎「現代化した原始美」, 『朝日新聞』1月9日（『高村光太郎』第6巻, 1957年, 筑摩書房に再掲載）。
- 1953 「日本のゴーガン・土方久功彫刻個展」, 『新夕刊』（1月20日）。
- 1953 「土方久功彫刻個展」, 『毎日新聞』（1月23日・夕刊）。
- 1955 (隆) 「原始的な香気—土方久功彫刻個展」, 『朝日新聞』（4月22日・夕刊）。
- 1955 瀬木慎一「土方久功彫刻個展」, 『読売新聞』（4月27日）。
- 1957 (隆) 「大胆な表現。土方久功」, 『朝日新聞』（1月24日・夕刊）。
- 1964 西常雄「個展評」, 『アカハタ』（3月28日）。
- 1979 「土方久功遺作展」, 『朝日新聞』（4月23日・夕刊）。
- 1987 「土方久功展—あふれる南太平洋の夢とロマン」, 『北国新聞』（5月22日）。
- 1991 「和製ゴーギャン・土方久功に光・世田谷美術館で作品展」, 『朝日新聞』（11月17日）。
- 1991 「土方久功展—パラオの人々へ愛情と共感」, 『東京新聞』（12月5日・夕刊）。
- 1991 岡谷公二「土方久功の回顧展—無垢な精神の透明感」, 『読売新聞』（12月6日・夕刊）。
- 2008 宝玉正彦「美術と文学の交差試す『パラオ—ふたつの人生』展」, 『日本経済新聞』（1月9日）。

2.5 書評・紹介

- 1970 「土方久功さく／え『ふたぶたくんのおかいもの』」, 『図書新聞』（10月24日）。
- 1974 (駒) 「流木」, 『徳島新聞』（10月5日）。
- 1974 「流木」, 『毎日新聞』（10月7日）。
- 1974 「流木」, 『読売新聞』（10月7日）。
- 1974 牛島巖「流木」, 『日本読書新聞』第1786号（10月28日）。
- 1975 中村基衛「土方久功著『流木』に寄せて」, 『未来』（第108号）。
- 1976 「サテワヌ島民話」, 『毎日新聞』（1月19日）。
- 1976 「サテワヌ島民話」, 『日本経済新聞』（2月2日）。
- 1977 鳥羽修郎「『サテワヌ島民話』をめぐって」, 『翻訳の世界』（第5号）。
- 1986 松居直「前代未聞の絵本の誕生—土方久功の絵本—」(上)(下), 『絵本のたのしみ』（11・12月号）。
- 1990 「民族学史に残る土方の著作集」, 『日本経済新聞』（8月19日）。
- 1990 (省) 「土方久功・著作集と伝記出版」, 『読売新聞』（10月1日）。
- 1990 鳥羽修郎「書評『土方久功著作集』第1巻『パラオの社会と生活』」, 『週間読書人』（11月12日）。
- 2002 おだまさのり「土方久功—こどもはみんな小さな民俗学者（そしてぎゃくもまた真なり）」, 『美術手帖』（第828号）。

註)

この主要参考文献は、清水久夫編「土方久功主要参考文献」（『パラオ—ふたつの人生展』図録、世田谷美術館、2007年、）、および清水久夫編「参考文献」（『土方久功展』図録、世田谷美術館、1991年）に掲載したものに、加筆、訂正したものである。その際、「土方久功年譜／著作一覧」（『土方久功著作集』第8巻、1993年）および『高知県立美術館 館藏品目録5 土方久功 日本＋南洋の表現』（高知県立美術館、2001年）掲載の参考文献を参照した。

土方久功自筆文献のうち、専門雑誌に発表した学術論文は一部省いた。なお、ミクロネシアの民

族学研究については、『Senri Ethnological Studies』No.21（1987）の巻末に、著書・論文一覧が付されているので、それを参照されたい。

文献のなかには、詳細な書誌データが不明なものがあるが、抜刷、日記の記載等により、掲載された事はほぼ間違いないので、そのタイトルのみ記した。詳細については、今後の課題としたい。

土方久功年譜

清水 久夫 編

西暦 (年号)	年齢	事項
1900 (明治 33 年)		[7月13日]父・土方久路(1870年生。後に陸軍砲兵大佐)と母・初栄(1877年生まれ。海軍大将、男爵・柴山矢八の長女)の次男として、東京・小石川林町六三番地に生まれる。父・久路の長兄は、土方久元伯爵で、農商務大臣、宮内大臣を歴任した、名高い明治の元勳であった。 のち、麴町上六番町に移る。当時、上六番町は、武家屋敷の名残をとどめていた。隣家は、母の生家、柴山家であった。
1906 (明治 39 年)	6 歳	[4月] 学習院初等科に入学。
1909 (明治 42 年)	9 歳	[12月]父・久路が1年9カ月のドイツ駐在生活を終えて帰国。再び千葉・四街道にある陸軍野戦砲兵射撃学校の教官に戻る。ドイツ帰りの父は、ドイツの中産家庭にならって、四街道の畑の中に別荘を建て、教鞭をとるかたわら、養鶏に熱中する。この頃の、カイゼル髭、タキシード姿の父、コルセットで胴を締め、引き摺るような長いスカートをはいた束髪姿の母が、「鹿鳴館時代」末期の舞踏会に出かける派手な姿が子供心に焼き付いていた。
1912 (明治 45・大正元年)	12 歳	[3月] 学習院初等科を終え、中等科に進む。 夏休みに、家庭教師および兄と富士山に登る。
1914 (大正 3 年)	14 歳	[6月] 父、野戦砲兵第一四連隊長として東京勤務となる。 当時の住まいは、山手線・恵比寿駅から程遠くない、庭池のある高級な借家で、後、近くにあった敷地千坪か二千坪もある宇都宮大将の留守宅へ移った。
1915 (大正 4 年)	15 歳	[3月] 父、陸軍砲兵大佐に昇進したが、このころより肋膜炎となり、さらには肺病となる。
1916 (大正 5 年)	16 歳	[5月] 父、肺病のため休職、10月には退役となる。父の月給は、休退職で3分の1に減り、その埋め合わせにドイツの軍事雑誌の翻訳などをしたりした。
1917 (大正 6 年)	17 歳	[3月] 学習院中等科を卒業するが、高等科に進むだけの財力はなく、進学を諦める(第一高等学校を受験するが、不合格)。 この頃より、父の病気が重くなり、献身的に父の看病にあたる。そのため、自身も肺病に感染し、茅ヶ崎の南湖院サナトリウムに通う。
1919 (大正 8 年)	19 歳	[4月] 東京美術学校彫刻科に入学。 [9月] 長年看病した父・久路が死去。茅ヶ崎の墓地に葬られる。享年

		<p>50歳。父の死後、母への扶助料がさらに減り、子供たちは母の里からの援助を受けるようになる。</p> <p>父が亡くなる前、目黒の競馬場道の田圃ぎわの借家に移り、父が亡くなってから天現寺の近くへ移り、その後、祖父の留守宅、麴町区上六番町十九に住む。</p>
1920 (大正9年)	20歳	<p>[12月] 帝劇での歌劇公演にさいし、山田耕作、土方与志を手伝う。</p> <p>翌年1月の大阪公会堂での公演のスタッフに加わる。</p>
1922 (大正11年)	22歳	<p>[7月6日] この日から毎日ノートに日記を書く(死去の5日前まで書き続ける。全部で、123冊におよぶ。)</p> <p>この夏、笹塚に家を借りて住み、小石川の土方与志邸にあった模型舞台研究所の仕事をするほかは、近所に写生に出掛けたり、彫刻を制作したりして過ごす。</p> <p>[8月] 模型舞台研究所が資生堂ギャラリーで、「光りと香の会」を開催する。久功も手伝う。</p> <p>[9月] 父の三年祭を行う。</p> <p>[10月] 「小石川で模型舞台がはじまり、例によって毎晩3時4時迄仕事をしては1、2時間寝て一寸学校に行って晩には又小石川へ行く」という生活をする。</p>
1923 (大正12年)	23歳	<p>[2月3日] 日記に、はじめて母と兄の不仲が記される。</p> <p>[4月] 美術学校の修学旅行で、京都、奈良の多くの寺社を見て回る。</p> <p>[7月] 目白に、佐伯祐三をたずね、2時間も話し込む。</p> <p>[9月] 関東大震災で上六番町の家を焼かれる。荷物と妹の赤ん坊を守りながら、火の中を逃げ延びる。多くの本を焼失する。／上目黒2198の借家に移る。</p> <p>[12月] 杉並村663の借家に移る。小さな四室に台所、風呂場だけの、新築されたばかりの明るい家だった。</p>
1924 (大正13年)	24歳	<p>[1月] 母方の祖父・柴山矢八(元・海軍大将、男爵)死去。</p> <p>[3月] 原稿を持って川路柳虹(詩人・美術評論家)を訪ねる。／東京美術学校彫刻科を卒業する。</p> <p>[5月] 復興記念合同彫塑展に「小さなブロンズの首」を出品する(3~18日)。／川路柳虹を訪ね、「黒子」「のぞき見」を日本詩人に投稿する。／杉並村619の借家へ転居する。高円寺幼稚園近くの古々しい二階屋だった。</p> <p>[6月] 土方与志、築地小劇場を創設する。</p> <p>[7月] 「悪しみの種」「底知れぬ復讐」「幸なことに」3編を『日本詩人』に投稿する。</p> <p>[8月] 二科展に彫刻2点を出品するが、落選。</p> <p>[9月] 「真昼の散策」「嵐の後の」「事実」の3編を『日本詩人』に投稿する。</p> <p>[10月] 「オモチャ」「空」の2編を『日本詩人』に投稿する。</p> <p>[11月] 「白日疑忌」を日本詩人に投稿する。</p>

		〔12月〕「六つの彫像」「墓場の記憶」「彼女は私の鏡であり影であった」「何も言はない」の4編をまとめ「薄暗い部屋から」として『日本詩人』に投稿する。
1925 (大正14年)	25歳	〔2月〕彫刻「軍曹」の像、出来上がる。 〔3月〕本郷の美術研究所へ通う。／美術学校の同級生、江波彰夫と台湾・台北へ仕事に行く（29日神戸出発、4月2日キールン港へ到着、6月25日神戸帰着）。 〔4月〕詩「薄闇」が、『日本詩人』第5巻第4号に掲載される。 〔8月〕「毎日毎日絵を画く、油でやる。水彩でやる。ペンでやる。本を読む。庭に出て草花をいぢる。」と日記に記す。
1926 (大正15・昭和元年)	26歳	〔1月〕建畠大夢の家の新年会に行く。／(17日)黄人社展(銀座・松坂屋)に、古い小さいブロンズ3点を出品する(～22日)。 〔4月22日〕東京府下高円寺620に移る。／(30日)上野広小路の寄席に行く。初めての寄席。 〔5月〕兄、久俊が、小城文子と、三光教会で結婚式をあげる。 〔6月〕築地小劇場で「朝から夜中まで」を見て満足する。／鶴見の花月園で開かれた築地小劇場の2周年記念の内祝に出席する。 〔9月〕院展に彫刻4点を出品するが、落選する。 〔11月〕木彫を始めるため、砥石、のみ等を買ひ揃える。
1927 (昭和2年)	27歳	〔2月〕丸善画廊で個展を開き、彫刻30点を出品する(23～28日)。／(23日)母・初栄、喘息の発作を起こす(4月の初めには、全快する)。 〔4月〕佐伯祐三展を見に、紀伊国屋画廊へ行き、佐伯と1時間ほど話す。 〔5月〕丸善画廊で伊藤熹朔の舞台美術の展覧会を見る。／帝室博物館で埴輪・唐の土偶を写生する。 〔6月〕豊島園で開かれた築地小劇場三周年祝賀会に出席する。 〔7月1日〕母・初栄が夜中に再び喘息の発作を起こす。／(6日)母・初栄、心臓麻痺で急逝。／(17日)高円寺620の借家を引払う。
1928 (昭和3年)	28歳	〔4月〕神奈川県・金沢へ、弟・久顕と一泊旅行する。 田中銀之助を訪ね、南洋行きを頼む。 〔7月〕大船の東郷吉太郎伯父を訪ね、南洋の事をきく。 〔10月〕横浜市中区元町一丁目で発見された貝塚を見に行く。
1929 (昭和4年)	29歳	〔3月7日〕南洋航路船「山城丸」に乗船、横浜港を出港。／(19日)パラオ着。／(21日)コロールに一軒家を借りる。家賃30円。これより自炊生活。／(25日)オバックル・ビールの名が日記に初出。 〔4月〕三河出身の大工・杉浦佐助が訪ねて来て、彫刻の弟子入りを頼む。 〔5月〕スケッチに出掛け、水彩画、油絵を描く。同時に、神話の採取、民族学、考古学の調査を精力的に行う。 〔6月〕パラオ支庁から辞令を受け取る。仕事は、島内の学校をそれぞれ1～3カ月ずつ彫刻の講習をして行くこと。身分は嘱託。

		〔7月〕公学校での彫刻の指導を開始する。／(27日)生まれて初めて月給をもらう。 〔9月〕八幡一郎を島内各地に案内する。
1930 (昭和5年)	30歳	〔7月1日〕役所を辞める。
1931 (昭和6年)	31歳	〔1月〕この頃、毎日のように油絵、スケッチを描く。 〔7月〕興南倶楽部で、油絵の展覧会を開く(25・26日)。 〔9月21日〕杉浦佐助とともに、長明丸でパラオを出発。ヌグル島、ラソール島、フェイス島、オレアイ島、イファリック島、ナムチック島、エラート島を経て、10月8日、サタワル島へ到着する。 〔11月〕戸籍調べをする。島民らとともに、森を切り開き畑にし、パラオからもってきた野菜の種を蒔く。
1932 (昭和7年)	32歳	〔1月〕管長サウファに頼まれ、島の子供たちに日本語を教える。 〔3月〕長明丸来航。伊藤巡査が12~13歳の子供五人をヤップの学校へ入れるため、連れて行く。 〔6月〕無人島プケノへ行き、十余日過ごす。 〔8月〕脚の踝のカスリ傷がうむ。この傷はいっこうに直らず、9月末には、激痛に悩まされ、歩けないほどになる。11月、快方に向かう。 〔11月〕久々に、女をモデルにしてスケッチを描く。
1933 (昭和8年)	33歳	〔6月〕彫刻に専念するため、家政婦イニボウピーと二人だけで村から離れ、森の中へ移り住む。 〔8月〕森を引き上げ、村へ戻る。
1936 (昭和11年)	36歳	〔9月〕ポノワットより喜代丸来航。本部巡査部長中山来島し、一泊する。
1937 (昭和12年)	37歳	〔2月〕国光丸来航。学校児童一名ヤップ島へ連れて行く。
1938 (昭和13年)	38歳	〔1月〕トラック島を出発した鯉船・第一根剛丸、重油欠乏し漂着。国光丸が来航するまで滞留する。 〔3月〕国光丸来航。オレアイ駐在巡査および久保田来島し、ポロワットの件、サウファの件(黄変死)、姦通盗婚の件を調査する。／南洋拓殖の珠丸来航する。 〔7月〕ポノワット(Polowat)から来た旭丸に便乗し、ナムチック(Namottzok)に行く(19~22日)。 〔12月〕杉浦佐助とともに、マイ丸でサタワル島を離れる。ナムチック、エラート、オレアイを経て、翌年1月5日、パラオに到着する。
1939 (昭和14年)	39歳	〔1月16日〕南洋庁地方課で、「サタワル島に於ける母系氏族制度の社会」という題で2時間程話す。翌17日は、「禁忌に埋もれ果てた現存未開人の生活」、18日は「Satawal島の神、Yaliuの輪郭」という題で、

		<p>2時間ずつ話し、後質問、雑談。／(22日)ゲルール達とガルミツへゆく(『青蜥蜴の夢』所収「ガルミツ行」)。／(29日)パラオ最後の王イベデュール死去。</p> <p>[3月] 南洋庁物産陳列所の囑託となる(辞令は3月9日付)。</p> <p>[4月] 杉浦佐助、南洋倶楽部で展覧会を開く(8日～)。／(17日)杉浦佐助、玉枝らとともに、山城丸で帰国(28日横浜港着)。</p> <p>[6月21日] 杉浦佐助の木彫展「南洋彫刻家・杉浦佐助作品展覧会」が、芸苑社主催で、銀座・三味堂ギャラリーで開かれる。丸彫15点、浮彫3点、面14点を展示。平櫛田中らも観覧(～24日)。／(24日)「土方久功氏蒐集南洋土俗品展」が、京橋の南洋群島文化協会東京主張所で開かれる。長谷部言人、八幡一郎、杉浦健一、金田一京助ら多数観覧。</p> <p>[7月8日] 土方蒐集南洋土俗品が東京帝国大学人類学教室で展示される。</p> <p>[8月1日] 山城丸でパラオへ出発(八日パラオ着)。</p> <p>[9月29日] 国光丸で、ソンソル島、メリール島、プル島、トコベイ島、ヘレン島、メリエル島、ソンソル島と回り、10月7日に戻る。</p> <p>この島巡りの際のプル島での見聞が「ナポレオン」(『青蜥蜴の夢』所収)となる。</p> <p>[11月] ヤップに在島している杉浦佐助の妻が自殺したとの電報が入る。</p> <p>[12月13日] 「新古典派展」(東京府美術館)に、南洋で制作した彫刻六点を出品する。</p> <p>[12月13日] 「毎夜、毎夜『クラブ』の様に入れかはり立ちかはり人が来て本も読めない、こんな風では図書館にでも逃げ出さなくては。」と日記に記す。</p>
1940 (昭和15年)	40歳	<p>[1月26日] 笠置丸で赤松(丸木)俊子、来島する。／(28日)マリヤとNgkatkip カツキップへ行く(日記にマリヤの初出)。</p> <p>[3月] 興発倶楽部で赤松俊子展が開かれる(15～18日)。／(20日)秩父丸で、赤松俊子とカヤンガル島へ行く(31日まで)。</p> <p>[4月] 「新古典派展」第四回展(東京府美術館)に、「南洋パラオ」「いれずみ」等出品する。</p> <p>[5月] 興発倶楽部で武田範芳の展覧会開催する(23～28日)。</p> <p>[7月13日] この頃より、精力的に木彫レリーフを制作する。</p> <p>[10月] この頃、腹背中の痛み、激しくなる。</p> <p>[12月] パラオの軍港化が進められ、役所の図書室、興発倶楽部などを海軍のために明け渡す。</p>
1941 (昭和16年)	41歳	<p>[2月] パラオ丸でトラック諸島、モートロック、サタワル、クサイ、ヤルート、サイパン、ロタ島などを回り、島民の慣習、土地制度、考古遺跡などを調査旅行する(2月1日～5月10日)。</p> <p>[5月] 物産陳列所勤務発令になる(商工課・地方課兼務)。</p> <p>[6月] 石川達三に会う。</p> <p>[7月6日] 中島敦、パラオへ到着。その後、久功と出会い、しばしば</p>

		久功宅を訪れる。
1942 (昭和 17 年)	42 歳	〔1 月〕中島敦と 2 週間、パラオ本島を一周する (17~31 日。この旅の様子は、トンちゃんとの旅, 『著作集』第 6 巻収載, に記されている)。 〔3 月 4 日〕中島敦とともにサイパン丸でパラオから帰国 (17 日横浜着)。 〔3 月 20 日〕土方与志, 入獄。 〔6 月 27 日〕人類学会 (東京帝国大学) で, パラオのウドウド珠貨について話す。 〔7 月 21 日〕南洋庁に退職願を出す。 〔9 月 6 日〕中島敦を訪ねる。寝ていたが, とくに悪い所は無かった様子。 ／ (13 日) 美術学校の 2 年後輩の後藤貞二の紹介で, 川名敬子と結婚。式は, 軍人会館で。中島敦も出席する予定と, 12 日の日記に記す。 〔11 月 30 日〕中島敦を入院中の世田谷・岡田病院へ見舞う。／南洋記録集『パラオの神話伝説』を大和書房より刊行する。 〔12 月〕陸軍専任嘱託として, ボルネオ調査団の民族班を担当する。北ボルネオへ行く。 〔12 月 4 日〕中島敦, 宿病喘息のため死亡する。享年, 33 歳。
1943 (昭和 18 年)	43 歳	〔3 月〕ボルネオ博物館長, 図書館長事務取扱を命ぜられる。／サタウル島滞在中の研究, 資料, 記録をまとめたサタウル島生活記録『流木』が刊行される。 〔5 月〕入院する。 〔6 月〕治療のため, 昭南島 (シンガポール) へ送られる。 〔9 月〕香港島病院へ入院する。
1944 (昭和 19 年)	44 歳	〔3 月〕バイカル丸で本土へむけ出港 (18 日大阪港着), 大阪の赤十字病院へ入院する。 〔5 月〕退院。東京の豪徳寺へ帰る。 〔6 月〕東部軍司令部へ退職願を出す。 〔9 月〕岐阜県土田村へ疎開。 〔10 月〕この頃から, 胃の具合が悪く, 背中への痛みが激しくなる。
1945 (昭和 20 年)	45 歳	〔2 月〕土田村の冬の寒さを嘆く。 〔3 月〕寒さのため, 体調がよくならない。 〔7 月〕空襲で, 近所に焼夷弾が落とされる。／東京の空襲のため, 3 冊の本となるべき原稿が印刷所で焼失する。 〔8 月 28 日〕会社が大幅縮小するため, 自発的に退職願を出す。 〔10 月〕この頃から, 体調がよくなる。
1946 (昭和 21 年)	46 歳	〔5 月〕近くにある倶楽部の建物に手を加え, 診療所兼住宅とする。 〔6 月〕再び背中, 胸, 腹の痛みを訴える。
1947 (昭和 22 年)	47 歳	〔5 月〕ウサギを飼い始める。 この頃, 体調よく, 毎日畑仕事に励み, また, 近くの川でよく釣をする。 〔10 月〕敬子夫人とともに, 3 年ぶりで上京する。「生まれて永いこと

		育ち暮した東京は何と云っても自分には故郷である。」と、日記に記す。有楽座へ行き、上野で仏蘭西美術展、文展を見る。再び土田村へ帰る。 〔12月〕概ね体調はよいが、暮も迫る頃、久々に激しい痛みを感じる。
1948 (昭和23年)	48歳	〔3月〕土田村を引き払い上京。世田谷区豪徳寺の川名高久宅に寄寓する。 〔6月〕この頃、歌劇、映画、ショーを見て、東京生活を楽しむ。 〔10月〕埼玉県久喜に、敬子夫人と中島たか(中島敦未亡人)を訪ねる。
1949 (昭和24年)	49歳	〔3月〕弟・久頭、稲葉真理子と結婚。 〔4月〕山崎の製材屋でレリーフに使う樺の板三枚を買う。 〔5月〕この年の正月からポツポツと書いていた「サテワヌ島民の部落と生活」を仕上げる(後に刊行される、『ミクロネシア＝サテワヌ島民族誌』の前編部分)。 〔6月〕この頃、精力的に木彫レリーフを制作する。
1950 (昭和25年)	50歳	〔1月〕三越劇場へ俳優座の「三人姉妹」を見に行く。24.5年ぶりの新劇。観劇後、10年ぶりに千田是也に会う。 〔2月〕日本アンデパンダン展に、木彫レリーフ「瓶から飲む子供」「パンの実を持つ子供」「青年像」「パラオの娘」(以上1949年制作)、「少女像」(サテワヌ時代の制作)の五点を出品する。／読売アンデパンダン展に、「足を投げ出した子供(パラオ)」「黥の女(ソソル)」を出品する。 〔7月〕成城にある柳田国男の民俗学研究所で講演をする。
1951 (昭和26年)	51歳	〔2月〕日本アンデパンダン展に木彫レリーフ「窓の女(パラオ)」「ユモレスク(少女)」を出品する。／読売アンデパンダン展に木彫レリーフ「イネマリ像」「美しき日(美しき昼)」を出品する。 〔4月〕日本橋・丸善画廊で個展を開催。木彫レリーフ36点、立体1点、面9点を展示する(10~14日)。12日の毎日新聞夕刊の美術欄に好意的に取り上げられたこともあり盛況で、「展覧会はまずまず大成功」と日記に書く。 〔9月〕俳優座の研究所で行っている、モデルを使ったクロッキーの会に参加する。以後、ほぼ毎週参加する。
1952 (昭和27年)	52歳	〔6月〕三越劇場に千田是也を訪ね、上演中の「現代英雄」を観劇する。 〔8月〕アトリエ兼応接間兼書齋兼物置ができる。これで、落ち着いて仕事ができる、と喜ぶ。
1953 (昭和28年)	53歳	〔1月〕日本橋・丸善画廊で二回日の個展開催(20~24日)。立体彫刻、木彫レリーフ20数点展示。 〔6月〕平凡社の谷川健一が訪ねてくる。 〔7月〕向井良吉から行動美術への勧誘を受けるが、断る。／『サテワヌ島民話』を三省堂から出版する。限定300部。 〔8月〕新宿のウイスタリア画廊で彫刻小品展を開催(24~31日)。木彫レリーフ、ブロンズなど20数点を展示する。

		〔9月〕「文化の果にて」が、竜星閣より刊行される。／（2日）「新夕刊」に「日本のゴーギャン 土民芸術に打込む孤高の彫刻家 土方久功」の見出しで、写真入りの紹介記事が出る。／（25日）「新夕刊」に、「原始美 土方久功の作品から」の見出しで、彫刻作品の写真が掲載される。
1954 （昭和 29 年）	54 歳	〔2月〕読売アンデパンダン展に、「蛮首（男）」「蛮首（女）」を出品する。 〔4月〕「美術手帖」のアトリエ訪問取材のため、宇佐見英治が訪れる。俳優座劇場の開場式に出席する。 〔5月〕俳優座劇場で彫刻 8 点を展示する。 〔7月 14 日〕丸善画廊で飯田善国展を見る。 〔8月 1 日〕世田谷区喜多見の谷川健一の新居を訪れる。
1955 （昭和 30 年）	55 歳	〔2月〕日本アンデパンダン展に、小さなレリーフ 3 点「像」「顔」「プロフィール」を出品する。 〔3月〕読売アンデパンダン展に、木彫レリーフ 3 点「Ranga—鬱金化粧」「島の伊達少年」「何かきこえる」を出品する。 〔4月 20 日〕丸善画廊で、第三回個展を開く（～23 日）。木彫レリーフ「二人」連作、「マスク」連作を主にした 20 点と、ブロンズ「蛮首」など 4 点。他に、パラオ、サテワヌ島での画稿 18 枚を出品する。 〔8月 2 日〕新樹会展（日本橋・三越）に 28 点を招待出品する。 『非詩集ボロ』を自家出版する（文庫本型、百頁）。南洋から帰国後の 1944 年頃から 1955 年頃までの詩を収録する。
1956 （昭和 31 年）	56 歳	〔2月〕日本アンデパンダン展に木彫レリーフ「横顔」を出品する。 〔4月 2 日〕高村光太郎死去。日記に「私の彫刻をいちはやく認めて下さり、それを至極無雑作に憚らず、殆ど最初に紹介して下さった恩人でもあった。」と記す。 〔6月〕随筆集『青蜥蜴の夢』（文庫本）を自家出版する。 〔7月〕小泉清と「蛮首（女）」（ブロンズ）と油絵「女の首」（8 号）を交換する。 〔8月〕第 10 回新樹会展（21～26 日）に、木彫レリーフ「妖霊（続パラオ連作）」「月（続パラオ連作）」「二人」、ブロンズ「男」「女」「鳥」「爬蟲」を出品する。 〔11月〕安川定男、宇佐見英治らと富浦にある横山の別荘へ泊まりに行く。 〔12月〕新宿のキャロットで、矢内原伊作帰国歓迎会を開く。
1957 （昭和 32 年）	57 歳	〔1月〕丸善画廊で 4 回目の彫刻個展を開く。木彫レリーフ 10 点、ブロンズ 5 点、石膏 4 点を出品（22～26 日）。朝日新聞 24 日夕刊に展覧会評が掲載される。 〔2月 20 日〕胃潰瘍が再発。慶応病院へ入院する。 〔3月 5 日〕胃潰瘍を手術する（22 日退院する）。 〔5月 29 日〕この頃から、彫刻の制作を再開する。 〔7月 31 日〕第 11 回新樹会展に彫刻「2 人 A」「2 人 B」「裸 A」「裸 B」

		<p>「首」「トルソ」を出品する（～8月4日）。</p> <p>〔10月18日〕自由美術展，二紀展を見る。「団体展はもうやめにしたらどうだろうか」と、そんなことばかり考えてしまう」と日記に記す。</p>
1958年 (昭和33)	58歳	<p>〔7月〕日本アンデパンダン展に小さなレリーフ、「顔A」「顔B」「顔C」3点を出品する。</p> <p>〔8月12日〕第12回新樹会展に、木彫レリーフ「仁王（赤・青）」「顔」「横顔」石膏「像」「首」を出品する（日本橋・三越 ～17日）。</p> <p>〔11月19日〕丸木俊『生々流転』出版記念会で司会を務める。</p> <p>〔12月15日〕文治堂書店の中島敦全集出版の打ち合わせに出席する。</p>
1959年 (昭和34)	59歳	<p>〔2月6日〕兼高かおる司会のラジオ番組「世界とび歩き」（ラジオ東京）に出演する。</p> <p>〔3月〕読売アンデパンダン展に出品する。</p> <p>〔4月17日〕詩の指導を受けた川路柳虹，死去する。／「近代木彫の流れ展」（国立近代美術館）に、「ピンカラノム子供」「いれずみ」を出品する。</p> <p>〔5月8日〕丸善画廊で第五回彫刻個展を開く（～12日）。木彫レリーフ13点，立体彫刻7点を出品する。</p> <p>〔6月4日〕土方与志死去（8日，俳優座の演劇葬）。</p> <p>〔7月2日〕『中島敦全集』（全4巻 補巻1巻 文治堂書店刊）の第一回配本として，第4巻が刊行される。この全集の装丁を担当する。</p> <p>〔8月11日〕第13回新樹会展に木彫レリーフ「二人の子供」「狛」を出品する（～16日）。</p>
1960年 (昭和35)	60歳	<p>〔6月22日〕文部省前に集まった各美術団体のデモに参加。国会の裏から有楽町まで行進する。／（26日）兄弟たちを集め，還暦の祝いをする。／（28日）国立近代美術館の昭和35年度第一期美術講座の「プリミティブ・アート講座」の第3回目に「南洋諸島のプリミティブ・アート」の演題で講義する（講義趣旨を「三彩」8月号に掲載）。</p> <p>〔8月9日〕第14回新樹会展に木彫レリーフ「なまっ白くない道化」「赤と黄の道化」を出品する（～14日）。</p> <p>〔10月18日〕新しき村展に木彫レリーフ「想う」「耳輪」を出品する。</p> <p>〔12月2日〕兄・久俊，死去。</p>
1961年 (昭和36)	61歳	<p>〔3月〕読売アンデパンダン展に木彫レリーフ一点出品。</p> <p>〔8月8日〕第15回新樹会展に木彫レリーフ「島」「胡坐」を出品する（～13日）。</p> <p>〔9月26日〕大阪へ宮武コレクションの調査に行く（10月1日帰京）。</p> <p>〔11月3日〕杉浦佐助が死亡したことを，当時テニアンにいた人から聞く。</p>
1962年 (昭和37年)	62歳	<p>〔3月〕読売アンデパンダン展に出品。</p> <p>〔8月14日〕第16回新樹会展に木彫レリーフ「ごみ浜」「禿山の昼」「リルスの浜」「タマナの浜」を出品する（～19日）。</p>

		〔12月29日〕安川定男, 草野心平, 矢内原伊作, 人見鉄三郎らと, 千葉・富浦へ一泊懇親旅に行く。
1963 (昭和38年)	63歳	〔1月12日〕南洋の島の物語の絵本『おおきなかぬー』を福音館書店から刊行する。 〔2月〕日本アンデパンダン展に出品する。 〔6月6日〕フォルム画廊で, びしょっふ英郎展, 丸善画廊で染木照展を見る。 〔8月20日〕第17回新樹会展に木彫レリーフ「神像」「ガルミズの女」を出品する(～25日)。
1964 (昭和39年)	64歳	〔2月18日〕日本アンデパンダン展に木彫レリーフ「ウマイの顔」を出品する(～3月1日)。 〔3月24日〕秋山画廊で個展を開く(～30日)。木彫レリーフ6点, ブロンズ18点, 石膏2点, 木彫「狐犬」, 計27点を展示。 〔6月2日〕第18回新樹会展に「首」(ブロンズ), 「踊り」(石膏)を出品する(～7日)。
1965 (昭和40年)	65歳	〔8月24日〕第19回新樹会展に木彫レリーフ「二人」「くびわの女」, ブロンズ「島の伊達少年」を出品する(～29日)。 〔9月30日〕絵本『ゆかいなさんぼ』が福音館書店より刊行される。 〔11月16日〕詩集『旅・庭・昔』を刊行する。(25日)詩集『鶴と共に』を刊行する。
1966 (昭和41年)	66歳	〔8月16日〕第20回新樹会展に木彫レリーフ「少年と鼠犬」「蜥蜴占」「洗身池」を出品する(～21日)。
1967 (昭和42年)	67歳	〔2月17日〕日本美術会20周年記念展(東京都美術館)に「黥の女」を出品する(～3月2日)。 〔5月6日〕丸木美術館の落成開館祝賀会に出席する。 〔8月22日〕第21回新樹会展に木彫レリーフ「南島閑日A・B」, 立体彫刻「小品トルソA・B」を出品する(～27日)。 〔9月12日〕パラオからタマエが来日, 小柳修二氏宅へ滞在する。小柳氏宅で会う。 〔11月13日〕此花画廊で水彩小品展を開く(～18日)。／(25日)パラオのMaria Merepからクリスマスカードと手紙が届く。毎日グラフのカメラマンがパラオを訪れた際, ネックレスを託した, そのお礼など。
1968 (昭和43年)	68歳	〔1月12日〕飯田善国夫妻と丸山尚一氏宅で会う。 〔4月11日〕NHKラジオ第一放送朝の番組「人生読本」で, 3回にわたり, 「未開と文明」について, 各10分ずつ話す。 〔5月6日〕霞ヶ関の霞会館で開かれた六年会(学習院中等科同窓会)に出席。／(7日)未明より心臓発作。しばらく安静する。 〔7月10日〕国立東京第二病院で検査。今のところは「一応大丈夫」とのこと。

		<p>〔8月6日〕第22回新樹会展に木彫レリーフを出品（～11日）。</p> <p>〔9月12日〕世田谷代官屋敷のある世田谷区立郷土資料館へ行く。</p> <p>〔11月6日〕セントラル美術館で佐伯祐三展を見る。</p>
1969 （昭和44年）	69歳	<p>〔8月19日〕第23回新樹会展に水彩画「南島試作・閑語」「媚」「むすめ」「パンの実」を出品する（～24日）。</p> <p>〔9月28日〕原宿・水交会館で亡父の50年忌を行う。</p> <p>〔10月20日〕北海道から佐々木充が訪問。中島敦作品研究のための調査。</p> <p>〔11月17日〕粘土木石紙油会（ときわ画廊）に、水彩画「島の男」「孤島」を出品する（～22日）。</p> <p>〔12月28日〕武田範芳のアトリエ改築完成パーティーへ行く。</p>
1970 （昭和45年）	70歳	<p>〔2月28日〕東京美術学校の後輩、後藤禎二死去。</p> <p>〔3月7日〕大倉画廊で水彩画個展を開き、水彩画27点、小品7点を出品（～14日）。／（30日）NHK教育テレビ婦人学級の「新家庭論」に「幸福な家庭」と題して、敬子夫人と出演する。</p> <p>〔8月11日〕第24回新樹会展に水彩画五点、「セベロングル」「イネマリ」「浴」などを出品する（～16日）。</p> <p>〔9月10日〕絵本「ぶたぶたくんのおかいもの」（福音館刊）を刊行。</p>
1971 （昭和46年）	71歳	<p>〔8月17日〕第25回新樹会展に、木彫レリーフ「閑語」、水彩画「洗身池」を出品（～22日）。</p> <p>〔11月24日〕大三輪龍彦・川名邦子の結婚式に出席するため、京都へ二泊する。</p> <p>〔12月4日〕披露宴の帰り、新宿駅で意識を失う。</p>
1972 （昭和47年）	72歳	<p>〔5月11日〕「ゆかいなさんぽ」第3刷できる。</p> <p>〔8月5日〕渋谷のテックで開かれた南太平洋研究会夏季講座で、「ミクロネシアの生活—サテワヌ島を中心に」と題して話す（6日も）。／（29日）第26回新樹会展に水彩画「石積み道（パラオ）」「タロサチたんぼ（パラオ）」「クロトンの娘」を出品する（～9月3日）。</p>
1973 （昭和48年）	73歳	<p>〔4月1日〕柴山昌生叔父の20周年忌を多磨墓地で行う。</p> <p>〔5月10日〕東小金井の串田孫一を訪ねる。</p> <p>〔8月14日〕第27回新樹会展に彫刻「二人・仲好し」「小猫習作」「どら猫習作」を出品する（～19日）。／（15日）未明に脈拍激しくなる。</p>
1974 （昭和49年）	74歳	<p>〔5月1日〕「草原」創刊号刊行。</p> <p>〔8月5日〕新樹会展の搬入日の夜、心臓発作を起こす。／（6日）第二八回新樹会に彫刻「猫犬」「トルソ」を出品する（～11日）。／（13日）『流木』の復刊ができる。</p>
1975 （昭和50年）	75歳	<p>〔5月25日〕「草原」の集まりに出席。</p> <p>〔6月15日〕太平洋文化協会の総会に行き、サタワルのことを一時間ほど報告する。</p>

		<p>〔8月5日〕第二九回新樹会に彫刻「痣のある人」、水彩画「砂浜」「休み場」を出品する（～10日）。</p> <p>〔9月23日〕弟・土方久顕、処女詩集「冬木原」の出版記念会を開く。／（27日）チェチェメニ号、サタワルを出発する。</p> <p>〔12月13日〕チェチェメニ号、沖縄へ到着する。／（15日）藤好画廊で水彩画展を開く。</p> <p>『サテワヌ島民話』の復刻版刊行。</p>
1976 (昭和51年)	76歳	<p>〔3月26日〕NHK ラジオの早朝番組、趣味の手帳で「はるかに遠くになった僕の南洋」と題して、15分間話す。</p> <p>〔7月11日〕誕生祝いをする。</p> <p>〔8月18日〕第30回新樹会展に、彫刻「大将狛」「中将狛」を出品する（～22日）。</p> <p>〔10月5日〕虎ノ門教育センターで、長編記録映画「チェチェメニ号の冒険」（門田竜太郎監督）を見る（30ミリ、シネマスコープ）。</p> <p>〔12月17日〕夜中、脚が痛み、寢床で呻吟する。</p>
1977 (昭和51年)		<p>〔1月10日〕新宿・東電病院に入院する。／（11日）午後八時、心不全で逝去。享年76歳。／（13日）神式により葬儀が行われ、「土方久功大人命」として、神奈川・茅ヶ崎の父母の眠る墓に葬られる。</p>
没後		
1978 (昭和53年)		<p>〔5月〕一年祭を記念して、『土方久功遺稿詩集』（編纂・今岡弘・土方敬子）が、「草原叢書」の第2集として、草原社から出版される。1979（昭和54）年</p>
1979 (昭和54年)		<p>〔4月13日〕新宿・小田急百貨店グランドギャラリーで「南太平洋にロマンを求めた—土方久功展」開催（～24日）。水彩画、木彫レリーフ、彫刻、素描など207点を展示する。</p> <p>〔8月10日〕『同時代』34号（特集・土方久功）発行される。</p>
1981 (昭和56年)		<p>〔7月11日〕「日本近代彫刻の展開」展（神奈川県立近代美術館）に、「まひるの夢」が出品される（～8月9日）。</p>
1982 (昭和57年)		<p>〔7月〕『土方久功詩集 青蜥蜴の夢』（土方敬子・今岡弘編集、草原社）刊行される。</p> <p>土方久功作品120点が世田谷区に寄贈される。</p>
1985 (昭和60年)		<p>〔3月〕『パラオの神話伝説』が三一書房より刊行される。</p>
1986 (昭和61年)		<p>〔7月〕ミクロネシアに関する資料29点、ノート40余冊、および日記帳122冊、その他資料を国立民族学博物館へ寄贈される。</p>
1987 (昭和62年)		<p>〔5月14日〕「南太平洋のロマンを求めた日本のゴーギャン：土方久功展」が、高岡市立美術館で開催され、水彩画、木彫レリーフ、彫刻など、</p>

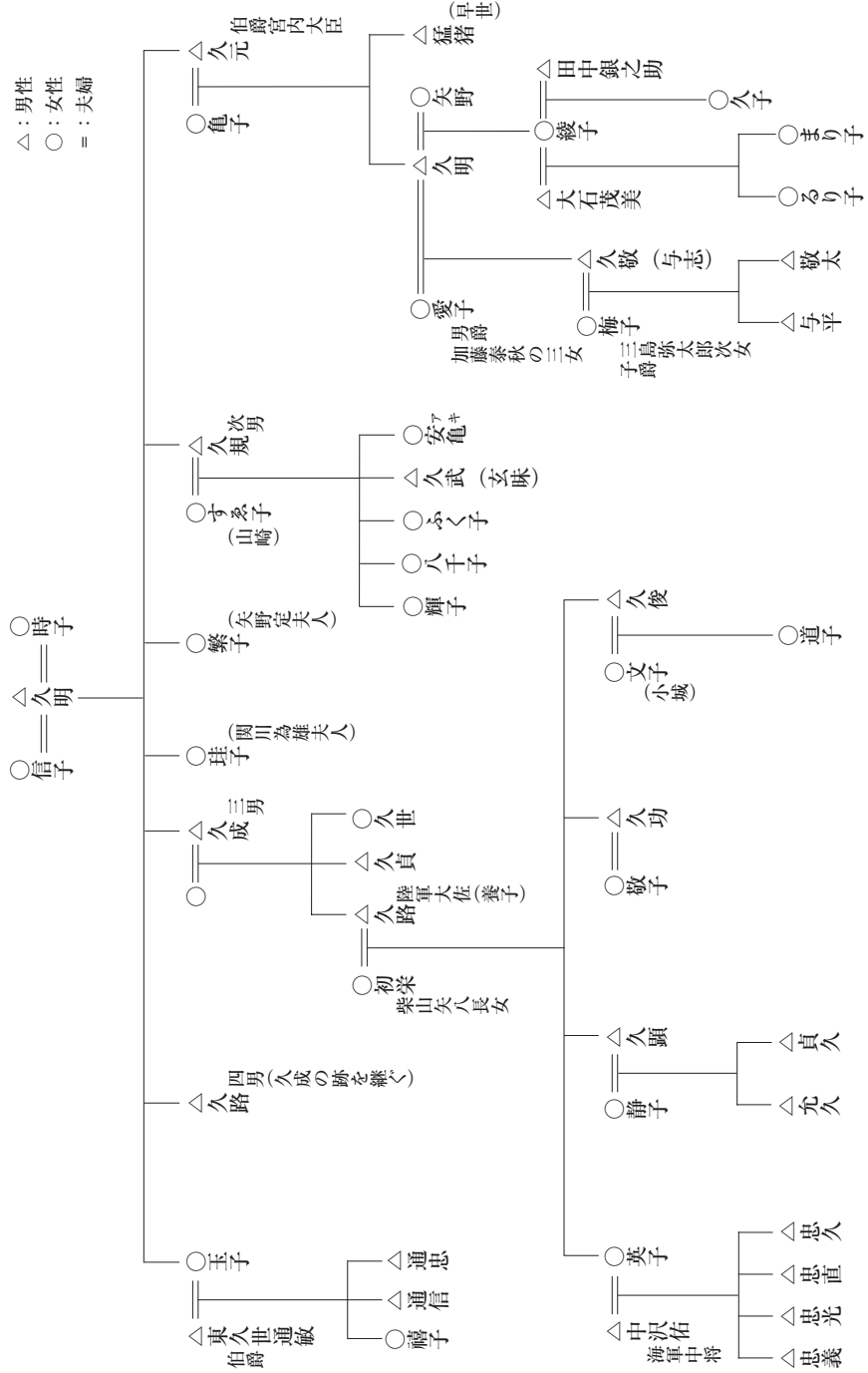
		124点が展示される（～31日）。
1990 (平成2年)		[7月]『土方久功著作集』（全8巻）第1巻「パラオの社会と生活」が、三一書房から刊行される。
1991 (平成3年)		[11月]「土方久功展—南太平洋の光と夢」が世田谷美術館で開催され、木彫レリーフ、立体彫刻、油彩画、水彩画など208点、久功が南洋で収集した民族資料27点が展示される（～12月15日）。
1992 (平成4年)		[2月14日]「日本近現代木彫展」（岡山県立美術館）に、木彫レリーフ「鬱金化粧」「月」「蜥蜴占」が展示される（～3月15日）。 [4月4日]「MASK 顔・表情」展（ギャラリー・TOM）に、「マスク(1)」「マスク(2)」が出品される（～5月24日）。
1993 (平成5年)		[10月]『土方久功著作集』全8巻が完結する。 土方久功作品89点が高知県立美術館に寄贈される。
1995 (平成7年)		土方久功作品・資料約2,900点が高知県立美術館に寄贈される。
2001 (平成13年)		[9月1日]「土方久功展 日本+南洋の表現」が、高知県立美術館で開催され、木彫レリーフ、彫刻、油彩画、水彩画、素描など、約300点が展示される（～9月30日）。
2007 (平成19年)		[11月17日]「パラオ—ふたつの人生/異才・中島敦と日本のゴーギャン土方久功展」が世田谷美術館で開催され、水彩画、木彫レリーフ、彫刻約90点が展示される（～2008年1月27日）。
2008 (平成20年)		[4月11日]「美術家たちの『南洋群島』展」が、町田市立国際版画美術館で開催され、マスク、レリーフ、水彩画、約50点が展示される（その後、高知県立美術館、沖縄県立博物館・美術館へ巡回。～2009年1月18日）。
2009 (平成21年)		[4月26日]「躍動する魂のきらめき 日本の表現主義」が、栃木県立美術館で開催され、立体彫刻「細い顔」、木彫レリーフ「宿命の歩み(A)」が展示される（～6月15日）。その後、兵庫県立美術館、名古屋市美術館、岩手県立美術館、松戸市立博物館へ巡回。（～2010年1月24日）。

※本年譜の作成にあたり、清水久夫編『土方久功年譜』『パラオ—ふたりの人生展』図録（世田谷美術館、2007年）、同編「年譜」『土方久功展』図録（世田谷美術館、1991年）を基に、加筆、訂正をした。また、これら年譜の作成にあたっては、丸山尚一編「土方久功年譜」『同時代』三十四号（1979年8月）を参考にした。

土方家・本田家系図

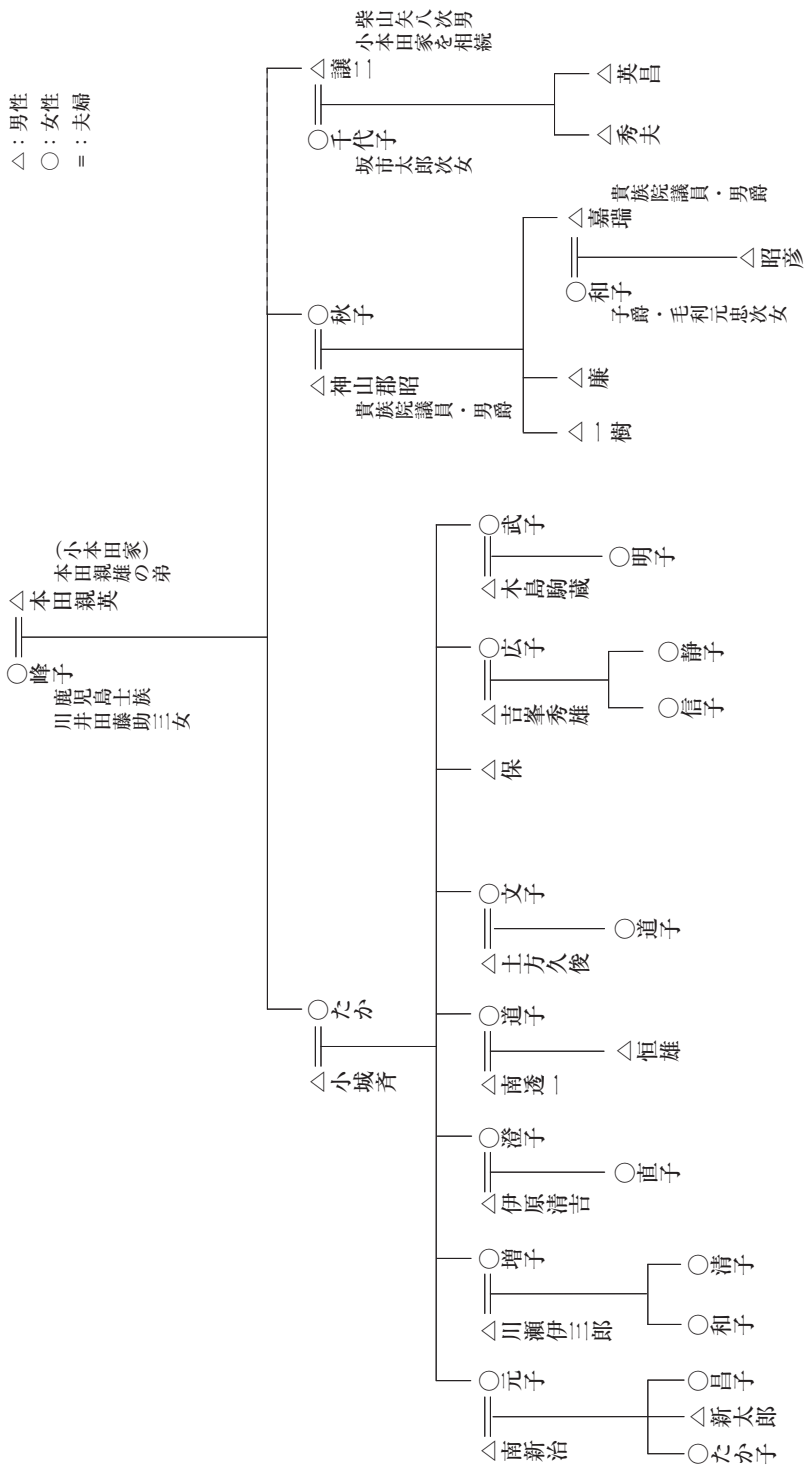
清水 久夫 編

△：男性
○：女性
=：夫婦



土方家系図

本田家分家系図



本田家系図

